

書評

不連続性の視点

——クロード・レヴィ＝ストロース著『神話論理Ⅲ 食卓作法の起源』書評——

渡辺公三・榎本讓・福田素子・小林真紀子（共訳）、みすず書房、2007年、604 + 51p.
= *L'origine des manières de table*. Plon, 1968.

近藤 宏*

『神話論理』は自然－文化という枠組みと共に読まれることが多い。料理、衣服という神話論理の中心的な主題も、「自然から文化への移行」を示すトピックである。自然－文化の枠組みは『神話論理』に限らずレヴィ＝ストロースの人類学で中心的な概念でもあり、神話分析のいたるところで議論にあがる。だが、この枠組みに対して、レヴィ＝ストロースから強い影響を受けている人類学者フィリップ・デスコラは「神話分析における自然－文化の二項式は、世界の理解の内在的な次元を表現するアンチノミーというよりも、総称的なラベル、意味論的な近道としてレヴィ＝ストロースは用いているように思われる」と批判していた [Descola 2004 : 302]。レヴィ＝ストロースが神話分析で用いる、自然－文化の枠組みがときおり議論を混乱させる、という意味ではこの評価は妥当なものかもしれない。だが、それは『神話論理』の絶対的な評価にはならないだろう。むしろ、その批判は、『神話論理』の意義を見出すためには、その議論を自然－文化の枠組みでのみ受容してはいけなく、と読解の方向性を示しているとも理解することもできる。そこで、本評では『神話論理』全体に通底する枠組である連続性－不連続性という視点から『食卓作法の起源』の解説を試みる。

連続性－不連続性の議論はしばしば自然－文化の枠組みに接続されて語られる。『生のもつと火を通したもの』では、装身具の獲得が人間集団に差異もたらすという神話を不連続の導入とする分析 [レヴィ＝ストロース 2006 : 472-76] や、漁撈の毒や鳥の羽の色の起源神話の分析で毒や虹などの要素に触れながら、連続性と自然を、不連続性と文化を結びつけて議論している [レヴィ＝ストロース 2006 : 419-443]。だが、『裸の人』の最終章「終曲」では遺伝コードなどに言及することで、一転して不連続性を自然に内在する原理と位置づける [レヴィ＝ストロース 2010 : 848-852]。このように、不連続の議論は常に同じやり方で自然－文化の対立に接続されるわけではない。『食卓作法の起源』では、自然－文化の枠組みについて「どの観点に立つか、また神話のどの時期を考察するかによって自然と文化の極は反転し、対立する意味を担わされるのである」と記されている [346]。この点に鑑みれば、不連続性の議論を、自然－文化の枠組みに還元せずに読み込んでいく、という試みもまた『食卓作法の起源』に即したひとつの読解だろう。

この見通しを立てると、『食卓作法の起源』のはじめに登場する神話、上半身と下半身を分割し、肉のにおいで魚をひきつけ漁をする女・モンキマネを主人公とする神話にあるような身体分割のエピソードは、身体を不連続で示差的な要素に分割可能な集合体として神話が思考たものと理解できる。このモンキマネのエピソードに導かれ、切断された男の下半身から生まれる魚、頭部だけで他者にまわり続ける人間などのモチーフを持つ神話が言及される。そして、いくつかの神話では「解剖学的身体部位のパラダイム」が存在し、それらは、社会学、天文学のパラダイムと結合していることが示される。不連続なものへと分割された身体は、太陽や月など異なる平面の要素に結合されるのである。

「解剖学的身体部位」に関する神話分析と平行しながら、第2部「神話から小説へ」では、不連続性は時間の平面に投射されて議論が展開している。つまり、不連続な単位の交代として経験される時間、周期性が問題になる。このパートでは、切断された頭部と天体の起源を結合する神話において、季節的周期、月周期、日周期の異なる周期

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 共生領域

性が思考されていることが明らかにされる。第1巻、第2巻で分析してきた神話の多くは季節的周期に関する神話だった。だが、太陽と月によるカヌーの旅というモチーフの変形関係をたどると、より短い周期である月周期、日周期が前面に現れる。そして、前者から後者への変形の途中で「物語の構成までも変えてしまう」[123] 変形が生ずる、という。この変形は次のように表現される。「ある同じひとつの物語の内容がそうした一連の操作をへると、そのあいだには不可逆的な何かが生じてきて、まるで洗濯女が水を切るために何度も絞った洗濯物のように、神話の素材もまた次第に内部の組織原則から外れたものになり、その構造的実質は散漫になって消えてゆく」[145]。このような状態になった神話は、レヴィ＝ストロースによれば、小説、なかでも短い周期という形式に従っている新聞連載小説に構成が類似したものであるという。自然に属するものである日周期が前景化することによって神話が解体するとレヴィ＝ストロースが語っているのは注目すべきことだろう。神話の「内部の組織原理」の議論では、自然と文化の枠組みから離れた所で彼の思考は展開している。季節的周期の問題は、第4部で、寒気の主であり、刺繍のための針を提供する動物・ヤマアラシをめぐる神話分析の主題となる。

第5部「均衡」では、神話に登場する10という数が考察される。5人兄弟や10頭のシカ、バイソンなどの獲物、造詣の神が与える10枚の服など多くの神話において5個組、10個組が頻繁に登場する。その意味を考察するために、指の数の数え方と5ヶ月の夏と5ヶ月の冬という暦の数え方に焦点を当てて分析が展開される。近隣の集団には10ではなく12個組、もしくは8個組と数の揺れがあることを指摘しながら、10の周辺に位置する数の問題について、数学の「基数」という概念とともに複雑な論理が進む。そしてその分析は、「あまりに多くなりすぎた不連続の単位がお互いの間に弁別可能な差異を許さなくなると、お互いくっつきあい、連続の力が、加算の力に打ち勝つようになる。この作用が10という数から始まるのである。これ以降、神話は10個組を2で割り、そうすることによってより力の弱い集合にして、この連続を破壊することに熱心になる」と展開する[417]。そして、暦の12という数の発生に関する古代ローマとアメリカ・インディアンとの共通点と、その数に対する態度の差異を考察し、「インディアンたちにとっては同じ群の中に、桁は同じだが次第に密度の高まる集合は恐怖に満ちた、とは言わないまでも危惧すべきことであった」と、その特徴を示す[497]。そして、歴史への態度の違いにまで言及する[497]。

数量と時間をめぐる新世界と旧世界の態度の比較という極めて壮大な文明論の内容をここで検討することはできない。だが、こうした文明論の根拠として神話にレヴィ＝ストロースが見出す「差異」への態度に注目したい。レヴィ＝ストロースは、要素が「互いに弁別可能な差異」を備えることができるような状態にとどまっていること、そしてその不連続性を活用する知の形式を神話に確認しているのである。神話との関係では、連続性－不連続性は対称的な関係ではなく、不連続性が神話に結びついているのである。

神話に確認される不連続性の活用という原理は、神話分析のあいだにみられる技術への言及を想起させる。第5部では、臓物食をする女とカエルの神話について考察を進めるため、獲物となったバイソンや鹿の肉体の利用法が民族誌に基づき言及される。そこでは、毛皮に刺繍を施した冬の衣服、また胃袋のオモテとウラをひっくり返す水袋の製作技術に触れながら、厚い－薄い、毛むくじゃら－滑らかな対比が言及される。肉から剥れた毛皮のオモテとウラは毛むくじゃらと滑らかな表面になり、胃の内側も「毛」と呼ばれた突起物に満ちた厚い部分と「毛」のない滑らかな薄い部分からなっているのだという[320]。解剖を伴う製作が身体部位の不連続的な性質を引き出しているのである。第6部の2節「3つの装飾品」では、動物の毛皮にヤマアラシの針を使って施された刺繍、戦争の戦利品として敵の頭部から剥された頭皮、陰毛による縁飾りという3つの項の関係が詳細に検討される。この3項の関係は太陽、月、石という「宇宙的物体」[457]の3項と結び付けられる。身体部位の要素は前者の3項にも見ることができるが、レヴィ＝ストロースの分析は技術面に重点を置いた形で展開される。ここでは、神話に導入される以前に、装飾技術が身体部位の示差性を増幅する。そしてその装飾技術を示差的な要素として神話が活用する。神話は自然にある身体部位も、身体部位を利用した装飾技術、つまり文化的要素も物語を構成する示差的な要素として同じように活用する。

解剖・技術と神話的思考の同型性は、第7部で言及される神話分析にも確認できる。洪水の起源神話にある、鳥の羽を抜いて鼻の穴に差し込む、母バイソンの内臓をその子であるバイソンの背に乗っけるといったエピソードと、同じ集団が行う狩猟儀礼で司祭が用いる「赤く塗って肺と心臓と気管を取り付けた」バイソンをあらわす棒が「内と外の弁証法」によって構成されているという。そして後者を「マルセル・デュシャンにならって言えば、狩人自

身によって裸にされたバイソンさえも、ということになるだろう」[544-545]と評する。のちに『仮面の道』で、仮面のつくりと神話の変形関係をみることで、神話的思考と造形技術の同型性を見出す試みは一つの主題として展開されることになる。

技術と神話的思考の同型性の問題を本評でこれ以上前に進めることはできないが、自然-文化の枠組みに代わり、連続性-不連続性の枠組みに注目し『食卓作法の起源』を読むことで、神話が不連続性を構成原理としていることを確認できた。レヴィ=ストロースによれば第3巻の分析とは不連続な項の結合、つまり関係をひとつの項とした「命題の論理の端緒」を見出すことであった[541]。第1巻では感覚的なもの、第2巻では内-外、容器-中身といった形態的なものが、それぞれ不連続性の要素として神話に活用されている様相を明らかにしていた。つまり、神話が活用する不連続性とは思考がもたらす不連続なカテゴリーの前段階にある、感覚的経験による不連続性なのだ。神話に内在する不連続性の視点とは、思考のカテゴリーとしての自然-文化の不連続性にに基づいているというよりも、様々なものや存在に備わっている属性に向けられていることもまた、レヴィ=ストロースは記しているのである。

参考文献

DESCOLA, Philippe

2004 Les deux natures de Lévi-Strauss. in *L'Herne Lévi-Strauss*. Michel Izard (ed.), pp.296-305. Édition de l'Herne.

レヴィ=ストロース、クロード

2006 『生のもものと火を通したもの』 早水洋太郎(訳)、みすず書房。

2010 『裸の人 2』 吉田禎吾・渡辺公三・福田素子・鈴木裕之・真島一郎(共訳)、みすず書房。

